

## ユタの語る自死遺族および自死者とのかかわり —沖繩の地域文化をふまえた自死遺族支援についての一考察—

鈴木 啓子\*, 鬼頭 和子\*, 村上満子\*

### Shaman's (Yuta) view of interaction with suicide surviving families and suicides — Study of support for suicide surviving families in the context of Okinawan culture

Keiko SUZUKI\*, Kazuko KITO\*, Mitsuko MURAKAMI\*

#### 要 旨

死の効率化といった社会文化的変動の中にあっても消滅することがないユタが担う沖繩のシャーマニズムは、人々の生活に結び付いた独自の地域文化をもたらしている。本研究の目的は、ユタのとらえる自死者および自死遺族へのかかわりを明らかにすることである。これにより、これまで注目されてこなかった沖繩の地域文化を踏まえた自死遺族支援への示唆を得ることを目指す。沖繩県北部地域で活動をしている死者の口寄せができる能力をもつ男性ユタを対象に深層面接調査を実施し、語りの内容および語る行為について質的記述的に分析した。ユタとしての歩み、自死遺族および死者とかわった経験、ユタとしてあるべき姿、欲望を制御するための闘い、そして生者のみならず死者の尊厳を守ることが語られた。死者と生者の尊厳を重んじるユタの考えが看護のスピリチュアルケアに通底するとの認識から、自死遺族支援、自殺予防の支援者としてのユタの関与の可能性が語られた。非公式な存在として人々の苦悩や死者に向き合ってきたユタとしての実践をふまえて、看護専門職との連携の上で遺族の語り合いの場を設けることが、今後の自死遺族支援の取り組みの可能性として示唆された。遺族の意向をふまえ、ユタとの語り合いを自由に選択できる等がシャーマンを交えての自死遺族支援には求められることも併せて検討した。

キーワード：シャーマン、ユタ、自死、自死遺族、死者

#### Abstract

Shamanism in Okinawa, as embodied by the Yuta, shows no signs of disappearing even amidst the modern sociocultural trend toward “efficiency” in death, and symbolizes a unique regional culture closely tied to people’s everyday life. The objective of this study is to clarify the Yuta’s perception of his interaction with suicides and suicide surviving families (“survivors”). The aim is to uncover suggestions for support of survivors in the context of Okinawan culture, an area that has previously been neglected. We carried out in-depth interviews with one male Yuta active in the northern area of Okinawa prefecture who has the ability to channel the spirits of the dead, and performed qualitative descriptive analysis of the content of his stories and the behaviors he related. He spoke of his history as a Yuta, his experiences with survivors and with

\* 名桜大学人間健康学部看護学科 〒905-8585 沖繩県名護市為又1220-1 Department of Sciences in Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Meio University 1220-1, Nago, Okinawa, 905-8585, Japan

the dead, how a Yuta should behave, the struggle to control desires, and the need to treat not only the dead as well as the living with dignity. In the awareness that the Yuta's philosophy regarding dignity of both the dead and the living underlies spiritual caregiving, he talked about the possibilities for the Yuta to contribute to survivor support and suicide prevention. This indicates the possibility of a future approach to survivor support that entails providing a setting for talking to survivors in cooperation with professional caregivers, based on the Yuta's practice, as an unofficial presence, of coming face to face with people's grief and the anguish of the deceased. We also investigated whether survivors would request support that includes the shaman, e.g., having the possibility to speak freely with the Yuta.

**Keywords:** shaman, Yuta, suicide, suicide surviving families, dead

## 1. 研究の背景

わが国の自殺者数は主要国の中でも高い水準にあり、国際的にみても深刻な課題である。自殺予防対策としてソーシャルキャピタルの醸成を目指す地域づくりや地域のつながりの強化が求められている（本橋, 2005）。住民同士が気遣いあえるネットワークづくりには、自殺対策という非常にデリケートな問題にかかわるが故の、きめ細やかさや繊細さが求められる（松浦ら, 2014）。一方、沖縄では、いわゆる「ゆいまーる」という相互扶助の精神が希薄化したとはいえ、現在でも冠婚葬祭時のみならず日常的に機能している。相互扶助の文化があるにも関わらず、自死が生じた際には、関係者は無関心と無関与を装い喪家からは一定の距離が置かれたり、また、葬儀も簡略化されたり特殊葬法が行われる等が起こっている（中村, 2005）。自死への関与については繊細な問題だからこそ、親密な相互扶助の関係において距離が置かれているとも理解できる。

家族成員を自死で失うことは、遺族にとっては計り知れない衝撃である。大切な人を自死で亡くした喪失体験にとどまらず、自殺をめぐるスティグマや社会の偏見といった苦悩も抱える。自死遺族には、故人を助けられなかった悲しみや後悔の一方で、なぜ自死したのかという苦悩、自死した故人および助けられなかった自身への怒り等の感情も入り混じり、その悲嘆は持続する。

沖縄では相互扶助の精神は社会関係資本として機能しているが、相互扶助による支え合いの中で、事故死や自死、夭死などの通常と異なる死は忌避される傾向があり、特殊葬法により異常性を封じ込めようとする意識が現代でも残っている（中村, 2005）。このような文化的背景の意識化は、沖縄の自死遺族支援について検討する上でも重要と考える。

東日本大震災の被災地では、悲嘆を抱える人々がさまざまな形で死者の霊と向き合ったが、宗教者による臨機応変の対応が「心のケア」の手がかりになったと報告され

ている（高橋, 2016）。東北地方の民間巫者である“イタコ”のサポート機能に着目した藤井(2013, 2018)は、自死遺族のグリーフワークとして青森県の下北半島や津軽地方で死者の口寄せを通して自死遺族と自死者の橋渡しをする“イタコ”を人々が利用しグリーフワークを促進していることを報告している。吉野(2014)もまた自死遺族支援の可能性について、イタコの活動が行われていた地域のシャーマンおよび特異能力者を対象に面接調査を実施し、死者への共感的な理解と自死者の夢を見ることによる死者との再会の可能性について報告している。

一方、沖縄には生と死の境界を越え往来し、人々に神や死者の言葉を伝えたり、鎮魂や祈祷などを担うシャーマンとして“ユタ”がいる。ユタは、病や死、問題の発生等の出来事を契機に、困難や苦悩を抱えた人々の不安や葛藤を軽減あるいは変化させる機能を果たしている（吉良, 1995）。大橋（2000）は、ユタが地域社会における「危機への対処システム」としての特性をもった「野のカウンセラー」としての機能を果たしているとしている。沖縄のシャーマニズムの伝統には、生と死の連続性、自他のつながりを回復させ、自分が経てきた身体的・精神的苦痛の経験に照らし合わせてクライアントの苦しみを救済しようとする信仰治療体系がある（塩月, 2005）。「医者半分、ユタ半分」といわれるように多様な対処行動がとられている。死の効率化といった社会文化的変動の中にあっても消滅することがないユタが担う沖縄のシャーマニズムは、人々の生活に結び付いた独自の意味をもつ。

これまでユタとスピリチュアルケア（浜崎盛康, 2011）、ユタと精神医療（大橋, 1998）、ユタと非行（大橋, 1998）、ユタとカウンセリング機能（吉良, 1995）、ユタと不登校（塩月, 2005）、ユタ民間信仰と精神障害者との関連の検討（座嘉比ら, 2020）があるが、自殺および自死遺族への支援についてユタに焦点を当てた先行研究は確認できなかった。沖縄において、今なお死の世界を引き受け、死の体現者として相談者と共にあるユタの民間巫者

としての態度から、自死および自死遺族支援を検討し、ユタの機能や自死遺族支援における可能性を探究することが重要と考えた。

## 2. 研究の目的及び方法

### 1) 研究目的

自死遺族に関わった経験のあるユタの語りの内容および語る行為の分析をとおして、自死遺族のグリーフワークにおけるユタの機能、および今後の沖縄県における自死遺族支援の可能性について検討する。

### 2) 研究対象及び方法

沖縄県北部地区に在住するユタ40歳代男性A氏を対象とした。研究者のネットワークの中で、沖縄県北部地区において実際にユタを活用した経験のある30代～40代複数の人々より共通して推薦されたのがA氏であった。A氏に研究者から研究協力依頼をし、協力を得ることができた。

インタビューガイドを用いて半構成的面接を行った。面接回数は2回、合計6時間9分の面接調査を実施した。面接内容は、協力者の同意を得てICレコーダーに録音した。調査内容は、①自死遺族からの相談の経験、②自死遺族および自死者へのかかわり、③自死者および自死遺族への思い、④自死遺族支援等についてである。得られた語りは逐語録に起こし、協力者の概要、自死遺族からの相談の経験、自死者への関わり、自死遺族支援へ関与できる可能性について語りを抽出し、先行研究との比較検討を行った。文中の斜体はA氏の語りを示している。語りについては「語るという行為」と「語られた内容」の両側面から検討することとし、「語りの行為」については能智(2015; 2020)の枠組みを使用し、「語りの内容」については抽出されたテーマについて悲嘆理論の視点から検討した。

### 3) 倫理的配慮

本研究は名桜大学研究倫理委員会における承認を受けており(倫理審査承認番号30-005-1)、研究が協力者の自由な意思によるものであり、協力後であっても研究協力の撤回ができること、話したくないことは話さなくてよいこと、本研究において個人情報およびプライバシーに関する守秘義務を遵守し、匿名性の保持に十分な配慮することについて文書を用いて説明し、書面にて研究協力への同意を得た。

## 3. 結果

ここではA氏語りの内容について、先行研究におけるユタに関する論述との比較も含めて紹介する。

### 1) 協力者の概要について

A氏は日頃ユタとしての活動で多忙であるものの本研究には協力的であり、自ら研究者らの所属先を訪れ調査への協力をしている。

#### (1) 自身の能力への目覚め

A氏は、代々男性がユタとなる家系に生まれ15代目にあたる。現在、沖縄にはこうした家系は5つしかなく、自分の子供には継がせたくないというユタもあり、3つの家系には跡継ぎはないという。A氏は、幼少時より死者が生者と同じように見えたため、死者と生者の区別がつかず、子どもの頃には同級生に「嘘つき」呼ばわりされたこともあったという。

*自分は幼い頃から、亡くなった人と生きている人の違いがわからなかったものだから、ずっとこう(亡くなった人から)訴えられたりしているの、(死者に)慣れていると思うんです。…亡くなったら亡くなった姿なんです。ちゃんと足もありますし、意見もあるので、普通の人と変わらないです。ただ、肌色が土の色になる、小さい頃はよくわからないので、なぜこの人は、こんなに青いんだろうとか、土の色をしているんだろうと不思議に思うくらいでした。ちゃんと亡くなっている人と認識できたのは中学校くらいです。皆が見えないものが見えるから、友達に言うと、「あれが嘘を言っている」といじめられたことがありました。*

自分に起きていることが誰にでもあることではないことを知り、自身の能力に目覚めたという。一般的に、我が国の巫者は東北地方のイタコに代表される東北日本型と、南西諸島のユタ・カンカカリヤに代表される南日本型に大きく分かれる。(塩月, 2012)。イタコが師巫のもとに弟子入りし巫業を修得し、資格の適格性についての試験が行われるのに対し、ユタは、運命的に巫者として定められ、カミダリー(神垂れ/巫病)という心身の不調を経験し、精神病的苦悩の中、ユタとなる決断をする者が多く、入巫の状況、年齢、背景はさまざまであるとされている(塩月, 2012; 浜崎, 2011)。A氏にはカミダリー等は見られなかった。ユタになるまでを次のように語った。

*いろいろな仕事をしたんですけど、建設業の時には、その時に限って、「事故が起こるな」とか、「ケガする人が出るな」というのがわかるんで、亡くなった人が付いて行く人(同僚)に自分が「一緒にコーヒーしようか」と無理にでも声をかけると事故が起きなかったり、ケガがなかったり防げるものだから、そういうことが結構あったんです。自分としては、今のこと(ユタ)をやる*

気は全くなかったけど、父の家系で代々っていうのが初めてわかって、じゃあ、やるなら最後まで責任もってやりたいという気持ちが芽生えて、27歳に決心して、今に至っています。

自身の能力への気づきと能力を生かすことの意味を実感したときに、ユタに成るといふ決意をしたのだった。

## (2) 専門性をもつユタのあるべき姿

ユタは神秘的な精霊界との交流が可能であるとみなされているが、その力は精霊の世界の一分野に対応し、ユタ毎にそれぞれ掌握する専門分野が限定されているという(桜井, 1973)。先祖の系統の探し出し(元祖事)を専門とする者、遺骨探しやヌジファを専門とする者、年忌・供養の死霊回向を中心とするなど様々な専門性がある(桜井, 1973)。その中でも、死者と対面できる者は少ないとA氏は語った。

ユタの中でも専門職が分かれるので、お仏壇に強い人とか、人のこと、人生のことに強い人とか、政治・経済に強い人とか、会社経営に強かったり、いろいろな分野がありはするんです。その中でも、必ず、この人はこれに特化しているというのがあります。(研究者: 県内で自殺について取り扱える方は?) 10名ですね。専門職のユタは1000名余りいますが、その中でも自殺を取り扱える人は30人いるかいらないか。実際には、断る方もいるので10名くらい・自分の場合は、総合的に全部できる形なので、自分には他のユタが対処できなくなったケースが回ってきます。

A氏は、自身については、ユタとしての総合的能力を有していると語った。ユタは一般的に来談者を取り巻く病や事故、事業の不成功などを聞き出し、それを祖先供養の問題と関連付けて解釈するという災因論を展開する(吉良, 1995)。なぜ、このような解釈を伝えるようになったのか、その背景についてA氏次のように語った。

……他の方(ユタ)は、この人の悪いところとか、あの、つき易いところをつついて、不安を煽っている……自分はそれはやったことないです。本来はやるべきことではないので。…「あなたの行いがひどい、ひどいって先祖が言ってるよ」とか、「こういうようにしないといけないよ」とか脅し文句になると、人って心から真心を込めてはやらないので、「やらないと自分が大変になる」としか思わないので、真心から込められないんです。真心があると先祖はちゃんと受け取ってくれるんです。なので、

自分としてはそういう脅し文句は使ったことないです。

先祖は悪さをするっていうよりも、「そうして欲しいから知らせる」っていう考えの方が、本来は正しいんです。第二次世界大戦後、そういう職業(ユタ)の人はご飯が食べられない。ちゃんと、働くことができないので、(ユタは)二足のわらじは絶対にダメなので、他の仕事をしようとしても絶対にこちら側に戻されてしまうので、そういったときに、うそでも言わないと、ご飯を食べられない時期もあったらしくて、そこが始まりみたいです。…

実際にユタの行うハンジ(判断)面接を体験した吉良(1995)は、ユタが相談者にいくつか質問をした上で相談者に関する事実を「当てる」ことにより独特のラポールが形成され、面接は一貫してユタがリードし、祖先供養・土地供養の文脈に移し替えて悩みが解釈され、受け身の相談者へ対処方法が具体的にユタから提示されるという特徴を報告している。一方、A氏の場合には生年月日等の個人的情報を聞き出すこともなく、問題を把握し来談者に対応するという特徴があった。

## (3) 欲望を制御するための自身との闘い

ユタは霊的世界との交流や連帯性を持たせる重要な機能を果たし、その社会的機能は決して小さいとはいえず(桜井, 1973)、現在においてもユタの活動が消滅する気配はなく命脈を保っている(及川, 2014)。そうしたユタとしての活動における自身への「戒め」について、A氏は次のように語った。

…自分の場合でも、入るときは、やっぱり「人を助けたい」と思って入ったけれど、…でも自分も人間なので、いつ変わるかわかりません。人間は、ね、あの、ふとした瞬間に欲が出る生き物なので、心が変わらないように努力はします。…自問自答、自分との闘いなので。自分が自分を律しないといけない。人間は欲の塊なので、いつかは、欲は持つかと思います。これを、どう抑えるかが問題なんじゃないかっていうのは、自分の中の毎日の、自己作業といえいいですね。まあ、欲を持たないようにするんだったら、どうしたらいいかっていう自己作業を毎日しています。…自分自身との対話です。…欲を制御できなくなると能力的に衰退していきます。力がなくなる、ですね。欲は力に対してふたになってしまうんです。……信頼できるユタは、有名になると人を助けきれなくなるので、表に立ちたくない人が多い。自分からユタっていうのは、あまり言わないです。一般人の中に溶け込んで、…

一步踏み入れてみて抜けることもできないこの世界が、欲をもってはいけない世界なのだと知ったとき



に、良いことをすることへの金銭や名声等の対価が返ってくるところで生じる自身への誘惑と闘い、その制御がユタに課せられた使命であるとA氏は繰り返し語った。相談者から「先生」と呼ばれること自体を避け、「Aさん」でいいと、相手が子どもであろうとも一人の人として丁寧に対応する、これは死者に対しても全く同じ姿勢であった。A氏は自らの能力を声高に訴えることもなく、生者、死者にかかわらず求めに応じて淡々と真摯に対応する非公式な裏の存在として、自身をとらえていた。浜崎（2013）が、ユタ自身が“ユタ”と呼ばれることを好まない背景には過去のユタ弾圧や禁止された歴史、そして、現在も軽蔑的意味合いをこめて扱われることも影響していると指摘している。A氏はひっそりと一般市民と同じ生活を送っていることが特徴であった。

#### (4) 本研究への協力の意図

以上のような背景と特徴をもつA氏は、今回、なぜ本研究への協力を引き受けたのか、その理由についても自らの意思として明確に語った。看護師は人の尊厳を守ることが責務であり、ユタとしてのA氏自身の基本としている理念が共通しているのではないかと思ったからであった。

まず第一に、看護師からの依頼ということで、たぶん死に向き合うってどういうことだろうなっていうのが念頭にあったので、そのことに対して、人の尊厳ってどうだろうっていうのを、あの、聞いてくるのではないかと、たぶんこれだったら自分の中で、あの、亡くなった方と話し合いとかしている中で、これを伝えきれたらなというのがあったんですよ。それで、引き受けましたね。生きている人も、亡くなった人も変わらないので、あの、尊厳というのは死に方ではないので。…〈研究者：これまでの研究で報告されているユタの姿と違いますか〉わかりやすく説明すると、今までの（ユタについての）常識っていうものが第三者の目で見ることができるようになる、先入観がなくなり、人々の受けとらえ方が変わっていくのではないかと思います。

A氏は死者の尊厳を生者の尊厳と同様に守りたい、そのことを伝えたいという思いから、本研究へ協力する意向が、時間を置かずに研究者らに伝えられた。これまでA氏は他の研究者への研究協力の経験はなく、本研究の目的に共感した故の調査協力の受諾であった。自ら受けたいじめの体験や自身が最も恐れている金銭や名声への誘惑、そこで求められる高い倫理観等、A氏はその特異的能力と自身の体験を初対面の研究者らに、驚くほどオープンに語ってくれた。

## 2) 自死遺族からの相談について

### (1) 相談に至る経緯

A氏は、自死遺族からの相談については、これまでに60件程度受けた経験があり、年間で数件相談があるという。自死以外の相談は四十九日をめどの相談が多いが、自死の場合には死亡後半年から1年後が多く、来談は沖縄全県からあるが、南部が7割、中部が2割、北部が1割であり、70代から80代の親世代からが8割、40代から50代の親世代が2割程度という。また、来談者は親族や友人、知人からのA氏の紹介という人づてが多かった。

近い親族の方もいれば、友人、知人の方から、「こういうふうに浮かばれていないみたいよ」とか言われれば、「じゃあ、どういう人がいい?」と探して来られる方とか、もしくは自分のことを知っている人っていう形で、紹介を受けてっていう方が多いです。…「この子が何を思ってこう(自死を)やったのか?」を親が聞いたり、「本人の気持ちがどうだったのか?」、「どういう最期?」、「最期に苦しんだのか?」と、…印象に残っているのは、「最期の言葉を聞きたい」という人が多いです。自分が気付かなかったけれども自殺してしまった。そういう自殺に対する「何で自殺したのか?」、そういうことを聞きたい…

また、家族の中にいる幼い子どもが自死者を自宅もしくは自宅近くで見たことがきっかけになっていた。

(自殺で亡くなられた方の相談は) 多いです。特にあの、小さい子、子どもさんがいるところとか、多いです。お仏壇を見るとこの人がいないよとか、あの、玄関先で泣いているとか、あっちの方角にいるとか、指さしたりとか、(自死者は) お家には入らない人が多いらしいので。申し訳ないって気持ちで入らないのかもしれないですけど、そういった方々が多いらしくて。小さい子、だいたい上でも5、6歳、7歳、小学1年生ぐらいですかね。それまでのお子さんがあるとは、ほぼ来ますね。

自死遺族は、これまで依拠してきた合理的な観念では理解できない現象を幼子や靈感のある他者から知らされることにより、ユタを訪ねていた。遺族は、日々の暮らしの中で死者に思いを馳せ、死者と対話し、決して答えることのない死者と向き合い続けることになる。また、生死を超えた交流は現実生活にも影響を与えることになる。遺族は、自死者の行末や自死者の思いを知りたいというニーズを強く抱き、ユタを訪れていた。

## (2) 口寄せによる死者の声の伝達

実際に、死者の声をどのように伝えるのかについては、A氏は口寄せを行なうことを語った。このときA氏にはWalsh (1990; 安藤ら訳, 1999) のいうシャーマンの特徴としての変性意識状態への移行は見られることなく、通常の意識状態のままで死者の声を遺族に伝えていた。

〈研究者：あの一、最期の言葉は、その場でAさんが感じられたことを、遺族にお話しするのですか？〉感じるといよりは、本人さんの魂を呼び寄せるので、その魂を呼ぶと自分の口を借りてしゃべってもらおうという形になるので、自分の意識はあるんですけど、言葉としては、その(亡くなった)ご家族の言葉になるので、例えば、ご家族の呼び方とかあるじゃないですか、あだ名で呼んでいるとか。そういうのを、自分が全くわからないけど、口から発するのは、その来てくれた家族の呼び名になるので、「本人だ！」って言う、「あ、この子が来ている！」って(自死遺族が)言うんです。…しゃべっている時っていうのは、本人さんと呼び出して、「もし、語りたいたことがあれば自分の口を借りていいから、語って頂戴」としか言っていないので、自分が感じたことではなく、自分の中のものではなく、本人さんの言いたいことっていう形になります。

死者である身内の声を聴いた遺族は、この世に実在はしない死者を実感し、その存在を確信していた。遺族はこれまで無言のまま不在という圧倒的存在感をもって死者に対し、ユタを通してまさに生前と同じリアルな存在を感じ取っていた。どのように死者の声を受け止めるかについては、憤慨する場合と、悲しみ、結果として安堵する場合に分かれるという。

…〈研究者：亡くなられた方から何が出てくるかは、わからない？〉全然わからないです。〈研究者：本人の語りたいたことは、ありのままに伝えられる？〉はい。…家族から「もう、いいです」という言葉が出た瞬間に、ここでは線を引かないといけないというかたち。それ以上聞きたくないという人の場合ですね。安堵する方もいれば憤慨する方もいますし、気持ち的に落ち込む方もいらっしゃいます。…憤慨する方は2割くらいですね。聞かずに帰られる家族の場合には、周りから「悔いが残るよ」「最後まで聞いた方がよかったんじゃないか」とUターンして来られる方もいます。本人さん達の心づもりがちゃんとできてからと思うので、時間は結構空いたりしますが、…8割は、ほとんどが、「あ、そうだったのか」と言って悲しむ方が多いです。悲しんで帰った人のうち、心が穏やかになったという人が結構多いです。自

殺したっていう方がいらっしゃることで心が乱れてしまい、うつに近い状態になる方(家族)もいらっしゃるのですが、それが和らいだとか。親からすると子どもが亡くなった、旦那さんが亡くなったとかになると、とても心に負担がかかるので、「それが和らいだ、ありがとうございました」とか、親がそういう(精神科)病院に通院していたけど、通院しなくてよくなったという話は結構頂きます。

A氏は、「口寄せ」によりこの世では誰も答えることのできない疑問である「なぜ、私たち(遺族)を残し、先に逝ってしまったのか?」「今、どうしているのか?」について、明確に死者の声を伝えていた。死者の霊魂が、死後、落ち着くべきところに安らかに鎮まっているのか等、遺族自身のスピリチュアルな不安、苦悩が、死別の悲嘆ケアとして重要となってくる。A氏は来談した遺族の多くが、これからの人生を死者と共に前向きに歩める意味づけをし、1回の面談で終了していることを語った。これは生と死の境界を超え、死者の声を生者に届け、死者との対話をもたらすというユタの特異的能力の発揮による。

当事者しか分かち合えない苦悩を共有する自死遺族当事者会での語り合いや、より高度な専門性を有する精神科医や臨床心理士等による複雑性悲嘆等への治療的介入であっても、決して解決できない自死の理由や自死後の魂の安寧への憂慮といった実存的な苦悩を、1度の相談で8割の遺族の悲嘆の緩和及び精神的な安寧にA氏が寄与できていることは、驚かされる結果であった。

吉野(2014:302)が伝統的な悲哀過程の規範理論を超える次世代モデルとして死者との心理的絆の尊重の重要性を述べているが、ユタが示す伝統的な死生観、すなわち死者と生者の世界が地続きであり、死者を起点としてこそ生者がある(塩月, 2012)こと、そうした絆を確かに結び直すことが、悲嘆緩和への有力な働きかけになることが示唆された。

## (3) 遺族に対する自死の意味づけ

自ら先に逝ってしまった者しか納得のいく答を持ちえない「なぜ、死を選んだのか?」という疑問が、遺族の中では繰り返し繰り返し生まれ、遺族自身の時間も自死とともに止まってしまっている中で、A氏はその自死をどう意味づけるかが要となることを、次のように語った。

…ご家族の方に「自殺」と言われたら、「自分で時間を止めたんですね」と言います。そうすると、「えっ?」て顔されます。…自殺は悪いこととなると、悪いことにふたをしてしまうのが人間ですけど、いい方向に向くという

のも人間の心理の中の一つなので。聞く側が「自殺なんだね」と言ったら、家族はそこでお終いなんです。だけど、

「時を止めた」となると家族には「はてな？」がいっぱい出てくる。…「この人は、自分の人生を、時を止めているから、次のステップに進めない」…「じゃあ、どうしたらいいか？」って言ったら、「いやなことが残っているはずだから、悔いとか、それをちゃんと受け止めて下さいね」って言うと、家族さんが「そういうことだったんだ」ということで納得して、「自分からも向き合おう」「亡くなった人に向き合おう」とするので、その時点で亡くなった方の方も、そういうものには和らいでくれるので。(そうすると時を進めることが)できるんです。…家族も「ああ、じゃあ次に進もう」と前向きにいい方向になるので、自分としては、「自殺というのは、天寿を全うする道半ばで時を止めたと、時を止めて、今、休憩時間だと思えますよ」と。「次に進むんだったら、…時を進めてあげた方がいいですよ」という話をします。その方が、家族は心がゆっくりにできるっていいですか。…

「天寿を全うした」とは言えない年齢の子供や配偶者の自死を、死者が「時を止めている」「休憩している」というリフレーミングにより、この世にいない死者が止めてしまった時を遺族が進めることができることをA氏は示し、また、そのために遺族にできることを探る方向に遺族の視点を変えることを語った。

〈研究者：遺族自身も止まってしまった時を進めていくのが可能になるということですか？〉はい、可能というのは、「じゃあ、この子のために何ができる？」「この人のために何ができる？」っていうことを模索するので、その時点で(家族は)進み始めるんですよ。「ああ、じゃあ、自分がこう、めげてはいけない」とか、「この子が好きだったもの、これだったから、毎日作ってあげよう」とか、「次に、生まれ変わるために、供養が必要ないかな」とか、そういうふうに進むという方向になってくれるので、その点でいえば、いい方向だと思います。

東日本大震災による被災者の悲嘆研究の中で、身内や友人など近い故人の霊を主観的に感じる自然な体験について聞き取り調査を行った堀江(2015)は、遺族にとって「悲嘆そのものは癒しにつながらないが、過去の故人を懐かしみ内的表象として強化するなら、(遺族の)気持ちは前向きになる」と述べている。被災前の故人が、今も変わらず、遺族を見守り、生き続けていると認識することにより遺族が前向きになれると指摘している。このような自然災害により身内を亡くす場合と大きく異なり、自死遺族は、理由が不明なまま一方的に突然、自死者自らの意思により関係

が断ち切られてしまっている。これは、遺族にとっては計り知れない衝撃である。

しかし、ユタを通して、死者が遺族との関係を拒絶し永遠に語らない存在ではなく、応答してくれる存在として認識できたときに、遺族が自死者の立場に立ち事態を振り返り、死者との関係の再構築に取り組むことが可能となっていた。その道筋を示すA氏との対話は、遺された者が前向きに自死者との対話を重ねていくことを可能としていた。遺族がA氏を通して感じとった死者からのメッセージを受けとめ、応えていく取り組みが、現実生活でも可能であり、自死者と遺族両者の止まってしまっている時を進めていくことになる。すなわち、遺族の悲しみが消えるわけではないが、死者に生前よりも深く思いを寄せ、死者を大事にできる関係の修復が可能となったといえる。

#### (4) 動き出すために時間が必要な遺族

しかし、一方でまだ時が止まったままで外にも出たくないような状況の遺族については、時間が必要となることもA氏は語った。

(まだ、亡くなって浅い家族は)「あなたに何がわかるというの!」としか言わないじゃないですか。それは時間が必要だから、まだ、こういう時間で聞かない方がいいのってなるんです。その時間というのは、時が止まってどれくらい経つといいのか、経ないといけないのかというのは、ご遺族さん、本人さんたちしか分からないので、少しでもお家から出られるようになったら、そういう話をした方がいいと自分は受け取っていますね。そういうときの方が、心も戻りつつあるから、前向きにちゃんと受け止めてくれるっていうのがあるんじゃないかと思っていますね。外に出たくないとか、そういう人を無理やり引きずりだして、聞こうとしても無理ですから。

死者にとって自死は救われる唯一の選択肢であったといえるが、遺族にとっては深い悲しみと終わりのない問いの伴う現実の始まりである。死別の悲しみは個人の生活を根底から覆してしまう体験であり、その不条理を生きていく遺族が、これを受け止めるプロセスは、その人独自のものでしかない。グリーンワークには正解があるのではなく、その人が見出したやり方で、その人に適した時間をかけて歩むしかない(若林, 2021)。ユタであるA氏もまた家族には各々に対話のできる適当な時機があり、これは各個人にしかわからないものであり、外出が可能になる等の変化を踏まえたタイミングを見計らった対応になると語った。身内の自死という理不尽な死は、周囲の批判的なまなざしや偏見、差別にもさらされ、誰にも語れず、自責感



や怒り、自身の存在そのものが揺るがされるような深刻な苦悩にさらされる。このような遺族は、社会的にも孤立し悲嘆は抑圧され、遷延しやすくなる(平山, 2004)。公認されない悲嘆(disenfranchised grief)(Doka, 2002)を経験している遺族が、ユタのようなシャーマンも含めて、何らかの支援にどのようにつながることができるのかが課題といえる。

### 3) 自死者との対話

#### (1) 一人の人として向き合う

前頁では自死遺族からの相談への対応に焦点を当てたが、A氏の語りにおいて特筆すべき点は、死者との対話であった。沖縄では人の死をその死に方によって「幸福な死」と「不幸な死」に分けることが知られている(塩月, 2001)。「幸福な死」は子孫が繁栄している人の老衰などの自然死であり、「不幸な死」とは、事故や自死等の自然な死に方以外の死であり、死者がこの世に恨みを残し、生者に祟ると考えられている(塩月, 2001)。自死が従来、忌み嫌われることとして沖縄の人々の意識下にあることについて、A氏は死者も生者も同じで尊厳をもった存在であり、死に方による差が全くないとした。A氏は生きて人間にも死者にも、その人の尊厳を大切に、一人の人として向き合うことの重要性を繰り返し語った。

あの、ちゃんと聞いてあげることです。生きてる人も、死んでいる人も、自分からしたら一緒なんですけど、亡くなった人ってある一定の人にしか、しゃべることができない。まあ、聞こえる人にしか、ちゃんとしたことをしゃべられないので、自分がこうやりたいとか、こうやっている、こうなっているよっていうの、家族に伝えたとしてもそれが適わないと、その人たち(家族)の肩をたたいて、「自分のことを聞いて」とかそういう風にやっている…

生者が死者から声をかけられているが、たとえば、聾啞者が手話がわからずにいる健常者と通じ合えないように、死者の声を聴けない状況を説明した。また、死者にも人権があり、苦悩を抱えている死者を一人でも無くしたいという一念から、多少の負担がかかっても支援したいという強い意志をA氏は表明した。

あの、なんて言うか、亡くなった人にも人権があると思うんですよ。自分の中での。だから、その人権を侵害したくないという気持ちなので、どんなに疲れていても、「あ、この人のために」っていうふうにしかなってないんです。疲れたら自分は食べ物を食べて眠れば、疲れは取れるけれども、その人たちは、ん、ずっと留まってしま

うことになるので、それはよくないと思って。疲れていてもいいから、やりたいというのは本心です。一人でも、そういう人が無くなればいいかなって気持ちからですね。

実際に、死者にどれくらいの時間をかけてかかわるのかについては、

短くて1時間、長ければ半月です。…長い方だと、家族に見捨てられたという方が多いです。…施設で自死された方ですけど、もう家族が会いに来ないと、自分は見捨てられたということで、実は、家族の方は入院をしていたらしいです。これを伝える人がいなくて、すれ違いでこうなってしまったということで、本人さんたち(家族)はとても悔やんではいたんですけど、まあ、このときには、(死者に)「家族はこうだよ」って言っても相手(死者)が聞く耳をもたなかったんで、「自分がこういう(偏見を向けられる)病気だから捨てられたんだ」という思いが強すぎて、それを少しずつ和らげる、あの、やり方で話していくのに大体半年くらいかかりましたね。人の心は、それぞれだと思うんですけど、あの、そういう思いが強ければ強いほど悪い方法、長い方向に、あの、いつまでたっても(死者が)聞かないです。

自死等の望まれぬ死に方をした者は、不幸の度合い、現生への執着と怨念の強さに応じつつ、そこで靈魂が往々にして忌避すべき存在にまでなると考えられる(長沢, 2011)。本研究でも、死者が「家族に見捨てられた」という苦悩の中で時間が経過していってしまうと、他者に心を開かない存在となってしまうとA氏は語っていた。この根底には、不幸な死者の苦悩への深い共感と寄り添い、その頑なな心をほぐすための相当の長い時間をかけることによる魂の癒しが必要となるというA氏の判断によるものだった。

#### (2) 死者の苦悩を受けとめる対話

死者が生きてる人と同様に、悲しみや怒りを抱き、助けを求めているが、それが満たされない場合に自死者の置かれる状況について、A氏は次のように語った。

(研究者：自死と一般の死とどう違うのでしょうか?)  
一般の方(死者)だと、あの、普通の人間(生者)と変わらず、どこにでも移動できるっていうのがあるんですよ。自殺する方って、そこに自殺に行くという思いがあるので、そこに留まってしまうので、その場所から動けなくなるんですよ。なので、その場所に行って、ご家族が「一緒に帰ろうね」とか、そういうことを言わない限りは、帰ることができなかつたりとか。あの場合によっては



すけど、そういう法要をして、この人を、あの、お家まで呼ぶっていう形をとったりすることがあるんですけど、…自分が帰りたいとか人に対して恨みがあるからっていうことで悪さをしたり、自分を「帰してくれ」って、「連れて」ってっていう風に伝えているつもりではあると思うんですけど、それが、まあ、一般の生きている人からすると、「いや、これは悪い霊だ」ということで「地縛霊」って言い方になってるのではないかと思います。3年忌を過ぎるまでは亡くなった人も帰りたいって気持ちがあるんですけど、3年忌を過ぎると、この人たちは迎えに来ないって恨みの心に代わってしまうので、お家に帰るよりは、この人たちに危害を加えたい、…〈研究者：誰も迎えに来てくれなかったりしたら、どうなりますか？〉 そういうふうになってくるので、そういう心を静めて、ご家族の方っていう形をとらないといけませんので、どうしてもかかわり方が、大分変わってきます。

研究者には、A氏の語る「語りかけてくる死者」の存在を客観的には確かめようがないが、A氏の説明は明確であり、死者の置かれている状況は詳細に語られた。

こうした霊が、その後、どのように変化するかについてもA氏はふれ、死者の尊厳を守る対応の必要性を明らかにした。例えば、自殺事故がアパート等で立て続けに起こる場合に僧侶等による読経がされ、供養が施されるが、死者はどのようになるのかを質問すると、

自殺した場所で毎日お経を読まない、この人は浮かばれないんです。それを大家さんが毎日、お坊さんと呼んでお経を唱えてもらうということは難しいじゃないですか。自分たちの場合は、直接亡くなった人と話し、語り合いをして、こういうことで家族の元に帰ろうか、家族も呼びに来ているよって言う。この、日取りまで決めて、家族、家族が呼びに来ているから、もう、ここでこういう苦しむよりは、家族の方で安らかになった方がいいんじゃないのという話をして、あの、折り合いをつけて、そこから連れていくというかたちなので。そうすると、まあ、ここにはもう思いとかそういうのがなくなるので、現れるというのはいないです。…お坊さんのお経との違いとしては、お経を読んで無理に鎮めるか、話して本人納得して家族も納得して家族の元に帰るか、どちらかになるの。その違いがあります。…そういうお経とかで無理やり鎮めると、鎮めるのはいいんですけど、お経が取れた場合、この人が逆に怒ってしまう場合もあるので、このときが一番怖いっていう形です。…なので、対話が必要じゃないかと思って自分は対話するように心がけています。

死者の気持ちを受け入れることなく封じ込めよう

とする者への怒りの激しさや、対応の難しさがある一方で、A氏は他者と向き合う際に基本となる相手と真摯な対話の重要性を語った。

### (3) 死者の安寧のための交渉と見届け

生きている人と同じように死者とも対話が重要であるとA氏は語ったが、前頁で述べたような自死遺族からの依頼ではなく、死者自からのA氏への要請もあるという。具体的には、借主がいつかない賃貸アパートの家主や第三者からの依頼が発端となる事例で、自死した場所から離れることのできなくなった死者と対話する中で、死者自らが家族の元へ帰りたいというメッセージを受けてのことであった。現実的にはどこに遺族が住んでいるかも、死者が誰なのかもA氏にもわからない状況ではあるものの、以下の対応をしていた。

〈研究者：あの、自殺された方のご家族がどこにいるのかもわからない場合には、どうされるのですか？〉はい、必ず、あの、(死者が)本籍地みたいな住所を必ず言うので、「自分はどこの誰誰で、どういうところに住んでいたけど、ここから、あの、自分が外に出るっていうのは、まあ、働いて他のところに住んで、ここで自殺した」とかっていう形なんですけど、「外に出たんだけど、こういうことになってしまった」と。「だけど、親元はこういう、何々市の何々番地にまだ居るはずだから連れてって下さい」という人が多いです。そのときは、もう、あの、連れていきます。ご家族の方は急に来られるとびっくりされはするんですけど、「自殺してこうなって留まってしまって、でも帰りたいと言っていたから連れてきましたよ」って言う、「ああ、そうですか、ありがとうございます」っていうふうに、ご家族の方は、まあ、この時は受け入れてくれるんです。

突然、死者と共に来訪したA氏を家族が受け入れない場合もあるのかという問いには、実際にはそうした事例もあり、死者のため家族の説得を試みるという。

〈研究者：受け入れないという家族の方もいますか？〉いはしますね。「もう、この人は、親にも迷惑かけて、自分たちにも迷惑かけたから、もう無縁仏にしてくれ」って言う方もいらっしゃるんで、そういうときには、「無縁仏にするんだったら親の了解がないと駄目なので」っていうことで、親が、両親が亡くなっていたら、このお仏壇に対して、「あの、『こういう事情で、無縁仏にしてくれ』と言う、言われているんですけど」っていうことで先祖を通じて話し合いをして、「まあ、親は許してるけど、あなたたちが許さなかったら、無縁仏になるんですけど、無縁仏になったら、ご家族も悲しむだろう

し、ご家族がいなくても親が悲しむからそれは止めてくれ」って説得はしますけれども、説得に応じる方と応じない方がいるので、応じない方の場合には、無縁仏の方に、各お寺にもそういうところはあるので、連れていったりはします。(研究者:ちゃんと最後まで見て) はい、これが自分たちの仕事だと思っているので、仕事って言ったらおかしいかもしれないけど、まあ、責任と言えればいいですかね。亡くなった人にも生きてる人にも魂はあるので、それを無下に扱うのは、自分は嫌いなので、できたら最後までつてかたちをとっています。

以上のように、遺族とも初対面の事例があるが、死者の願いを受けとめ、遺族のもとに帰るまで、それが難しい場合には、お寺で責任をもって供養をして頂けるように連れていくところまで死者と付き合うことが、自分の使命であると語っていた。無報酬で死者のためにユタが働いていることを初めて知ったが、そのことに驚くと共に、A氏の死者を含めた人と向き合う姿勢にはグリーンケアに関わる専門職を超える専心と自己献身があるものと考えている。死者の求めに応じて死者自身のために対応するというケアについては先行研究では確認できず、生者だけではなく死者のために活動するユタの機能を知ることができた。大村(2019)は、東日本大震災後にボランティア活動として誕生した僧侶等による遺体を前にした読経や被災地での追悼行脚等の供養は、死者の魂の救済であり、医療的ケアや福祉的ケア、心理的ケアなどが及ばない領域において存在意味があると述べているが、A氏の語りから、死後の死者の状況や死者へのケアのもつ意味が明らかになった。

#### 4) ユタによる自死遺族支援の可能性

塩月(2012)が、死霊の崇りのような観念は、時代の変化の中で非科学的とみなされるようになり、災因としての死霊から祖霊が子孫に崇ると変化している指摘をしているが、A氏はそうした災因論を否定している。むしろ、生者と同様に存在している死者の苦悩について語り、また、突然の関係の断絶、永久に対話が不可能となった状況におかれた遺族の苦悩についても語り、相互の支援、それだけではなく自死を予防するための働きの可能性についても語った。具体的には、語り合いの場を設けることの提案であった。

(研究者:自死遺族支援について、どうするといいいのか、どうあるといいいのか?についてはいかがでしょうか?)  
家族としては、自殺をわからなかったとか、受け止められなかったということ、まあ、本人の悩みを受けとめられなかったとかで、自己嫌悪に陥ったり、自死をしてしまう方

もいらっしやるので、そこをどうケアするかが問題になってくると思うので、そういうような話を聞いて、また、ああって言って自己嫌悪に陥らせるよりは、違う方向から見て、この人たちが、あの、心を軽くできるかっていうのを、あの、話し合いの場でもつてった方がいいかと思いますね。…自殺なされた家族の方っていうのは、だいたい、自分がわかってあげられなかったという自分への戒めが強いので、そうなると、どういう人に相談をしても同じなんです。そうじゃないよ、この子は、こういう風に話をしているよと言って話をすると、本人さんたちは、心を開いてくれるので、はい、そういう場を設けないといけないんじゃないかと思います。(研究者:そうすると、たとえば、相談会を開いて、そういう中でAさんのお話を伺うのも) そういう場を、もつことも必要だと思いますね。

また、今回、本研究の調査協力をしているように、研究者ら専門家からの招聘により、ユタ自身のもつ知識を伝えることにより、遺族の悪い方向への選択への流れを変え、自身を守ることに貢献できるのではないかと語った。

本来はこういうお招き(本研究への協力依頼)を頂いて、こういうふうにお話ができるという形が、本来の自分たちの本当の役割ではないかと思います。そうすれば、少しでもあの、知識ができるじゃないですか。そうすると、悪いことから身を守ることができることにもなるので、そういったのを広めるための、あの、何で言えいいですかね。知識を広めることとか、悪いものがあれば、それをいい方向に結ぶとか、そういう役割をするのが自分たちの本来の仕事ではないかと思っているので。

A氏は死に方は問題にならないとし、むしろ、生きている人も亡くなっている人も苦悩を抱えていることから、自殺予防のためには我々が身近な存在の一人ひとりの苦悩をどのように気付いてあげられるのか、そこに周囲の人々がどのように向き合うかが重要であると語った。他者と真摯に向き合うことこそが自殺を踏みとどめることに貢献できると考えていた。

(沖繩で自死が忌避されることについては)それを、どう気づけるのかが気づけないかを自分は伝えたいですね。心の内で、家族で、こういうふうになっている人がいるじゃないのかとか、そういう人が悪い気持ちを持ったりとかとか、人にだまされてこういう気持ちになっている人を気づいてあげられることによって、その話を聞けば、その気持ちが晴れたり解決できるじゃないですか。そうなれば死ぬことはなくなるので、それを、あの、自分は伝えたいっていうのはありますね。それが自殺を留

めるものになるんじゃないかと思うんですけど、…人と向き合うことができていたら、どんなに苦しいことも助けてあげる親、親心だったりきょうだいの気持ちがあるので。その、あの、心に救われて、自殺は留まるので、それは確実に言えることではあるので、そこに気づいてもらいたいというのはありますね。だから死には関係ないんです。いかに気付けるのか、気づけないのかだと思いますね。

最後に、A氏は他者と真摯に向き合う役割について、それを自分がすべきか、専門家が果たすべきかは問題ではなく、各々が置かれた場所で苦悩の只中にある人と向き合い、共に問題に取り組むとよいのではないかと語った。

…家族にも、そういうふうな、わだかまりが解けたりとか、戒めが解けるようになれば、本人さんたちも頑張れるようになるので、そういうふうのできる場が本来は必要んじゃないかと思いますね。ただ、それが自分の役割なのか、他の人の役割なのかでも、あの、同じだと思います。真正面から向き合ってくれる人がいれば、自分の、あの、ユタの立場じゃなくても、そういう人がいればいいんだと思います。…専門職には様々な人がいるけれども、そうい

う立場の人が、傷ついた人とか、あの、悩みを抱えている人がいるところで一つ一つ解決すればいいんじゃないのってしか思わないので。

#### 4. 考察

以下、【 】で結果の小タイトル、( ) を下位小タイトルで示し述べる。

##### 1) ユタであるA氏の語るという行為の検討

図1は能智(2020)のによる4つに象限「語り手の純粹経験」、「社会的言説による構築」、「聞き手による構築」、「語り手の自己呈示」に、A氏の語りの結果を整理したものである。この枠組みからA氏の語りをとらえると、【自身の能力への目覚め】(死者との対話、ユタに成る決心)、そして【自死遺族からの相談】(相談に至る経緯、口寄せによる死者の声の伝達、遺族に対する自死の意味づけ、動き出すために時間が必要な遺族)の経験、そして【死者との対話】(一人の人として向き合う、死者の苦悩を受けとめる対話、死者の安寧のための交渉と見届け)については、A氏の過去から現在までの個人的な経験の蓄積からの語りと位置付けられる(図1参照)。

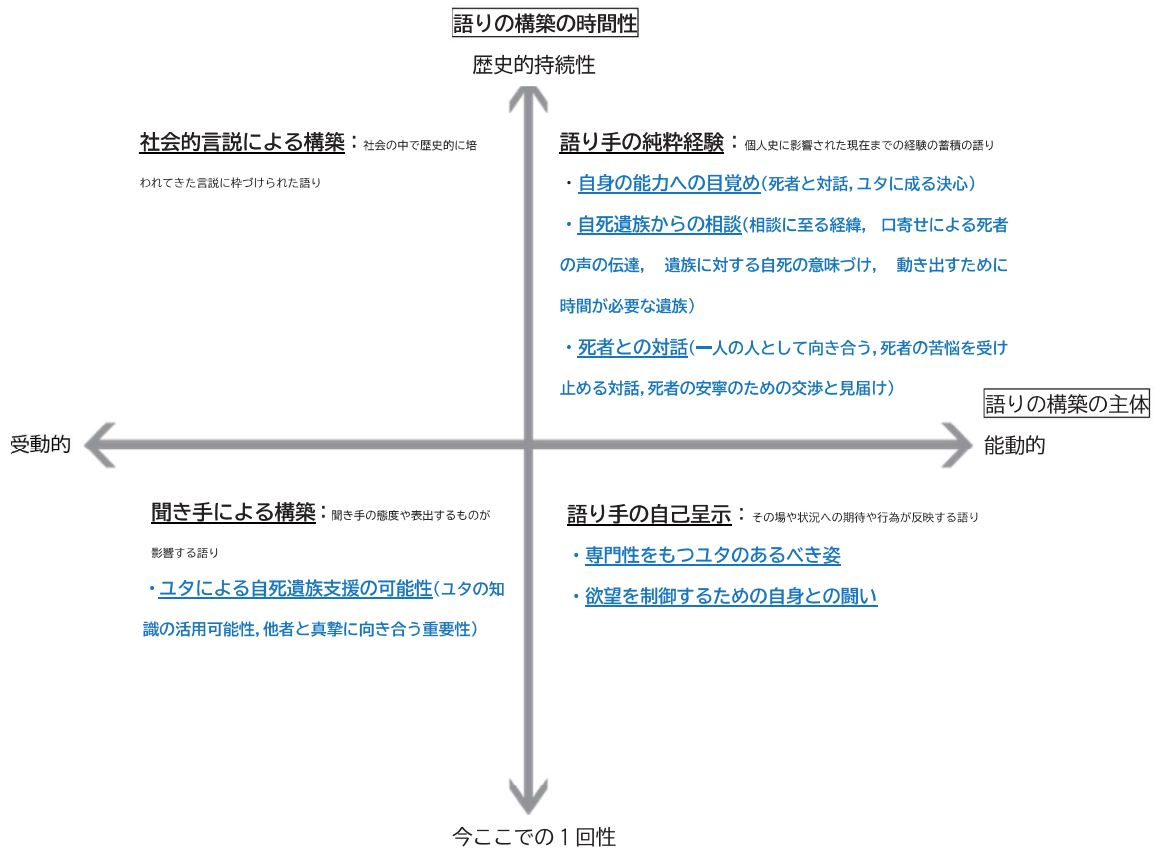


図1 ユタの語りの行為(能智(2020)の枠組みを利用し作成)



また、【専門性をもつユタのあるべき姿】や【欲望を制御するための自身との闘い】は、ユタについて全く知識のない研究者達に本来のユタがあるべき姿、自身の金銭欲求等の欲望のためにユタとしての能力を使うことがいかに不適切で危険かを、また、自身もその欲望と日々闘っている弱さのある人間であると率直に語るという、現時点での自身のユタ像とそこを目指しての期待、そのための自己制御について語った。この語りという行為から、研究者らはA氏の個人的な経験や特異的能力とその状況の理解ができ、また同時に社会的に構築されているユタ像が本来のユタではないというA氏の強いメッセージについても理解することができる。

研究者らが本研究において期待して聞き取りをしていた、【ユタによる自死遺族支援の可能性】(ユタの知識の活用可能性、他者と真摯に向き合う重要性)については、調査において研究者らが発信する態度や表出するニーズに応えるものであった。研究者らとの対話により、自殺予防ができるのではないかとというA氏の考えとも重なりユタの知識の活用可能性、生者と死者を含めて真摯に向き合う重要性について語ったといえる(図1参照)。死者を含めて人と真摯に向き合うことができれば、自殺予防につながることで、自死遺族支援についても効果を上げる可能性があることが、研究者らとの対話により明らかになった。今回、シャーマンであるユタが自身のもとを訪れる個別の来談者の相談のみにかかわるのではなく、一般住民も含めて死者も生者も同様に苦悩から救いたい、自死者の発生を防止したい、そのために可能性があるとの語りが明らかになった。

及川(2013:123)が、「ユタと近代社会を単純に対立させてとらえるような構図は再考されるべきである。むしろユタの信仰の力には、近代社会に取り込まれて啓蒙や社会事業に持続する一方、伝統的な祭祀の廃祀を導くような転位もありえたのだ。そうした錯綜を踏まえないければ、今なお一向にユタの活動が消滅する気配はないという現状自体、そもそも説明ができないはずである。」と述べている。「人の尊厳を大事にする仕事をしている専門職だから研究協力の承諾をした」というA氏が、死者と生者の尊厳を重んじるユタの考えが看護のスピリチュアルケアに通底すると認識していたこと、自死遺族支援、自殺予防に関心をもっていった点は、今後の沖縄における地域文化に根差した自死遺族支援の可能性を検討する上で重要と考える。

## 2) ユタであるA氏の語った内容の検討

人為を尽くしても、なお解決し得ない問題につきあったとき、その最終的決断を下すきっかけをユタに

求めようとする傾向は、研究者らの周辺で若い世代の人たちがユタを利用していることから、現在でも薄れていない。特に、自死による死別体験は遺族にとっては単なる一つの出来事ではなく、自身の関与している世界との関係が突如異質なものと変貌することであり、遺族は過去、現在、未来を失い、そして人生を失うことにもつながる体験をしている(若林, 2021)。その苦悩はその人自身の中から生まれる非常に個別的な体験である。この体験者の語りについて、A氏は常に共感的に耳を傾ける姿勢をもち、遺族だけではなく自死者へも誠実に対応し、その声を遺族に伝える口寄せを行っていた。A氏の元を訪れた自死遺族を対象とした調査は倫理的にも現実的にも困難であり第三者の立場での検証はできない。来談者の8割が1回の相談で面談が終了し、遺族自身も精神科病院への通院が不要になった等の精神症状の改善や悲嘆の緩和などにつながっていた結果から、その対応が効果的であったことが推察される。

A氏が語る死者の存在について、我々は確認することはできない。しかしながら、遺族にとって死者は確実にその生活にかかわり続ける存在である。末木(2006)は、死者は無限の不在感として残された遺族を圧倒するがゆえに、遺族の体験している感覚的事実は思い込みや幻想ではないとしている。このような身近な人の死がもたらす悲嘆からの回復については、かつては死者と分離し、死者のいない現実と向き合うことで可能になるといい(Freud,1917; 井村・小此木訳, 1996)、死の受容プロセスとしてキューブラー・ロス(Kubler-Ross,1969; 鈴木晶訳, 2001)による6段階が利用されてきた。平山(1997)は正常な悲哀過程として7段階モデルを提唱している。これらの死者のいない現実への適応を回復とする伝統的な悲嘆理論は実証的エビデンスを欠き、誰もが等しく経験し取り組むべきグリーフは存在しないこと、グリーフ行為が最終的に「回復」に至ることもないとNeimeyer(2002; 鈴木訳, 2006)は批判している。Hedtkeら(2004)は故人を思い出し故人との関係を保ち続けることを通して遺族自身も豊かな人生をおくることができるとしている。ここで、遺族にとって重要なのは故人との象徴的絆の継続的維持であり、これに関連した行為や仕事は健全で重要なものという認識である(Neimeyer, 2002; 鈴木訳, 2006)。

今回、A氏の語りから、ユタを通して故人とつながることにより、遺族は故人との絆を確認することが可能となり、その結果、過去、現在、未来に渡る故人と遺族との関係が意味あるものとして変化し、遺族と故人の止まってしまった時を動かすことが可能となっていた。Neimeyer(2002; 鈴木訳,2006)は、グリー



フ行為は身近な人の死により一変してしまった現実に対応するための複雑な過程であり、まぎれもなく文化に依拠するものと述べている。今回のA氏の語りから、非公式な存在として人々の苦悩や死者の苦悩に向き合ってきたシャーマンであるユタの実践をふまえて、看護専門職との連携の上で遺族の語り合いの場を設けることが、沖縄における自死遺族支援の取り組みの可能性につながることを示唆された。

しかし、一方でA氏の語りにあったように求めて来談しても受け入れられない遺族や、ユタそのものに抵抗感を抱く遺族がいる可能性も否めない。自死遺族とイタコの対話について検討した吉野(2013)は、シャーマンと自由に話せる距離を保ち開放的に話せることの重要性にふれている。自死遺族の多くは死者の魂が成仏しているのか、死後の安寧を非常に気にしている。死への思いや宗教観、シャーマンへのニーズ等について遺族の思いを日頃の交流から把握した上で、遺族の希望があった場合に、シャーマンを交えての語り合いの場を設けたり、また、そうした支援を受けた遺族と共に語り合うなども一つの自死遺族支援の可能性として考えられる。

## おわりに

東日本大震災後、被災地へのボランティア活動から始まった宗教家による供養や読経、死者へのケアが生き残った生者の癒しとなった多くの事例から、臨床宗教師が養成されている(大村, 2018, 2019)。死後の世界観をもつ宗教者だからこそ、死者のケアが可能となり、死者の魂と向き合うことができ、残された家族の心を癒す働きになる。シャーマンであるA氏の語りより、死に方による差がないこと、遺族が死者の思いをくみ取ることにより死者の止めた時が動き出すこと、死者も生者もその尊厳を守り真摯に向き合うことが重要であることが確認できた。これにより、従来実施されている自助グループや分かち合いの会では、取り扱わない死者との絆を取り戻す、悲嘆のケアの可能性が示された。ユタを交えて自死遺族同士の語り合いを通して、一人ひとりの遺族が一樣でない苦悩を理解したり、とらえなおしたり、共に考えることにより、一歩先に歩みだすための方略を見つける機会を提供できる可能性が示唆された。

本研究は、沖縄県北部地域で活動するユタであるA氏の語りの検討による。ユタの活動の地域差やシャーマンとしての能力の違いにより、得られる結果は異なるものと考えられる。時代の変化や死の取扱いの変化の中で、沖縄の地域文化に根差した自死遺族支援についての検討は、引き続き求められる。

最後に、研究者らの研究疑問につきまして素朴な疑問

も含めて長時間にわたり丁寧に真摯に語って下さったA氏に心から感謝申し上げます。また、本研究における開示すべきCOIはありません。なお、本研究は科学研究費助成(挑戦的研究(萌芽)、課題番号18K18611)を受けて実施したものです。

## 文献

- Doka, K. (2002) *Disenfranchised Grief: New Directions, Challenges, and Strategies For Practice*, Research Press
- Freud, S. (1917): *Trauer und Melancholie* (フロイト・S. 井村恒郎(訳) (1996) 『フロイト著作集6』「悲哀とメランコニー」人文書院: 137-149)
- 藤井博英 (2013) : 自死遺族のグリーフケアを促進する民間信仰の実態とサポートシステムの構築, 科学研究費助成事業研究成果報告書, 基盤研究 (C), 課題番号22592594
- 藤井博英, 柏葉英美, 大山一志, 松下博宣 (2018) : 自死のグリーフケアを促進する民間信仰の実態, 東京情報大学研究論集, 21(2), 5-17.
- 浜崎盛康編著 (2011) : 浜崎盛康著, 沖縄の民間信仰とスピリチュアルな現実をめぐって 『ユタとスピリチュアルケア』, 19-27, ボーダーインク
- 浜崎盛康 (2007) : 沖縄県における入院患者の死とユタのヌジファについての研究 (Cヌジファとグリーフ・ケア, まとめ), 琉球大学研究報告書 (法文) 2007. 3.  
<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/20.500.12000/12250>
- Harner, M (1990): *The way of the shaman: tenth anniversary edition*.3rd.ed. NY: Harper Collins
- Hedtke, L, Winslade, J. (2004): *Remembering lives : conversation with the dying and the bereaved*. Baywood publishing company. (ヘツキ, L・ウィンズレイド, J・小森康永・石井千賀子・奥野光(訳) 2005. 人生のり・メンバリングー死にゆく人と遺される人との会話ー金剛出版: 162)
- 平山正実 (1997) : 死別体験者の悲嘆について : 主として文献紹介を中心に (松井豊編 『悲嘆の心理』サイエンス社 : 85-112)
- 平山正実 (2004) : 自ら逝ったあなた, 遺された私 家族の自死と向き合う, 6-8, 朝日新聞社.
- 吉良安之 (1995) : 沖縄の民間巫者 “ユタ” のカウンセリング機能の一研究ー宗教的面接場面の分析からー, 健康科学, 17, 51-58.
- Kubler-Ross, E (1969): *On Death and Dying*. New York : Scribner. (キューブラー・ロス, E. 鈴木晶訳 (2001), 死ぬ瞬間ー死とその過程について 中央公論新社)

- 松浦仁美, 西嶋真理子, 星田ゆかり (2014): 自殺予防におけるソーシャルキャピタルを醸成する保健師活動尺度の開発, 日本地域看護学会誌, 16(3), 53-64.
- 本橋 豊 (2005): 自殺予防運動の実践とその価値, 日本公衆衛生雑誌, 69(5), 358-362.
- 宮城航一 (2011): 浜崎盛康著, ユタとスピリチュアルケア 沖縄の民間信仰とスピリチュアルな現実をめぐって, 62-63, ボーダーインク
- 長沢利明 (2011): 葬送と肉体をめぐる諸問題, 国立歴史民俗博物館研究報告第169集, 107-136.
- 中村文哉 (2005): 沖縄社会の二つの葬祭儀礼ー沖縄のハンセン病問題と「特殊奏法」ー, 山口県立大学社会福祉学部紀要, 第22号, 23-53.
- Neimeyer, R.A. (2002): *Lessons and Loss: A Guide to Coping*, Routledge. (鈴木剛子訳『大切なものを失ったあなたにー喪失をのりこえるガイド』春秋社, 2006)
- 能智正博 (2015): 質的研究におけるナラティブとディスコース, 鈴木聡志・大橋靖史・能智正博 (編著), ディスコースの心理学ー質的研究の新たな可能性のために (3-23). ミネルヴァ書房
- 能智正博 (2020): 行為としての「病いの語り」, 質的心理学フォーラム, 12, 77.
- 及川 高 (2013): 神女の回心はいかに語られたかー近代沖縄における村落祭祀の解体と力の転位, *contact zone*2013, 101-127.
- 大橋英寿 (2000): 津軽と沖縄のシャーマニズムにみる癒し, 日本心身医学会誌, 40(6), 424-428.
- 大橋英寿著 (1998): 『シャーマニズムの社会心理学的研究』, 弘文堂.
- 大塚協太 (2003): 沖縄における家族の「伝統」と「近代」ー家族規範に関する「伝統の創造」の諸相をめぐってー, 国際関係・比較文化研究, 2(1), 27-49.
- 桜井徳太郎 (1973): 沖縄のシャーマニズム, 弘文堂, 208-209.
- 塩月亮子 (2005): 社会病理と沖縄シャーマニズム, 日本橋学館大学紀要, 4, 87-95.
- 末木 新 (2017): 自殺の予防と心理学ー展望とその課題ー, 心理学評論, 60(4), 265-276.
- 高橋 原 (2016): 東北被災地域における心霊体験の語りと宗教者による対応に関する宗教学的研究, 科学研究費助成事業研究成果報告書, 挑戦の萌芽研究, 課題番号25580012.
- 知念久美子, 野村幸子, 盛島幸子, 美底恭子, 糸数仁美 (2011): 沖縄における地域文化的看護体験, 文化看護学会誌, 3(1), 30-37.
- 座嘉比照子, 大湾明美, 田場由紀 (2020): 沖縄県における民間信仰からみた精神障がいに関する文献検討, 沖縄県立看護大学紀要, 21, 10-17.
- 若林一美 (2021): 自死遺族として生きる一悲しみの日々  
の証言, 青弓社, 207.
- Walsh R (1990): *Shaman and healing*. In Scotton, B. W., Chinen A.B., Battista, J.R. (eds) *Textbook of transpersonal psychiatry and psychology*. NY: Basic Books, 96-103. (ウォウシュ, R. シャーマニズムと癒し スコットン, B. W., チネン, A.B., パティスタ, J. R. 安藤治・池沢良朗・是恒正達 (訳) (1999). テキスト／トランスパーソナル心理学ー精神医学 日本評論社, 115-124.